

第 62 回医療薬学公開シンポジウム 開催報告書

実行委員長 外山 聡
(新潟大学医歯学総合病院薬剤部)

平成 28 年 10 月 30 日（日）に、新潟ユニゾンプラザ（新潟県新潟市）において第 62 回医療薬学公開シンポジウム（主催：一般社団法人日本医療薬学会、共催：新潟県病院薬剤師会、後援：公益社団法人新潟県薬剤師会）を開催いたしました。当日は日曜日の開催にもかかわらず 110 名と多数の皆様に参加いただきました。なお参加者の内訳は、病院薬剤師 97 名、薬局薬剤師 11 名、その他 2 名でした。

今回のシンポジウムでは、昨今話題となっている「ポリファーマシー」をキーワードとして取り上げました。テーマは「ポリファーマシーの削減に向けて薬剤師ができること」とし、病院薬剤師・薬局薬剤師が日常業務の中でこの問題にどのように取り組んでいけばよいのかについて、病院・薬局の分野で活躍されている先生方に講演していただきました。

シンポジウムでは、まず、医療法人知命堂病院薬剤科の武藤浩司先生より、「日常業務から行えるポリファーマシーの削減に向けた取り組み」と題して、ポリファーマシーに関わる社会的背景や問題点から、病院薬剤師として実際に取り組まれている処方見直しの具体的な取り組みまで、幅広い内容でご講演いただきました。続いて、株式会社コム・メディカル 蔵王調剤薬局の三浦雅彦先生からは、「在宅医療から考えるポリファーマシー解決へのアプローチ」という演題で、在宅医療に薬局薬剤師の立場から、「問題のある」ポリファーマシーを見つけ出す姿勢・習慣の大切さと、処方医とのコミュニケーションをはじめとして他職種連携の重要性についてご講演いただきました。

特別講演では、医療法人渡辺会 大洗海岸病院薬剤部 新井克明先生より、「時代がどう変化しようとも薬剤師が行うべきことは医薬品の適正使用！一簡易懸濁法から敗血症 DIC の PBPM、そしてポリファーマシー改善まで」と題してご講演いただきました。講演の中では、先生のこれまでの様々な医薬品適正使用の取り組みを通して、業務改革とポリファーマシー削減につながった事例を数多く紹介していただきました。

先生方のご講演と活発な質疑応答が行われた総合討論も含め、シンポジウム全体を通して、ポリファーマシー対策は決して特別なことではなく、日常業務の中で薬剤師が医薬品の適正使用に努めることでその職責を果たすこと、また他職種との情報共有と連携を図ることが大切であると改めて認識させられたシンポジウムとなりました。

最後に、本シンポジウム開催にあたり、ご共催、ご後援いただきました新潟県病院薬剤師会、新潟県薬剤師会、そして企画・準備にご尽力いただきました医療薬学事務局の方々に厚く御礼申し上げます。